

## 「教会のかしらキリスト」エペソ1章15-23節

エペソ人への手紙1章の前半ですばらしい救いが神によって私たちに与えられていることを語ったパウロは、今日の箇所では彼らエペソ教会のクリスチャンたちのために祈りを捧げています。ここでパウロは「どうか、私たちの主イエス・キリストの神、栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えて下さいますように。」と祈っています。それは彼らの心の目がはっきり見えるようになるためでした。そしてこの霊的な事柄は御霊によらなければ私たちは理解することも見ることもできないからであります。パウロは今までエペソ教会のクリスチャンたちが気づいていなかった救いのすばらしさ、神さまの偉大な力をもっと知ってほしかったのです。それではパウロは、彼らエペソ教会のクリスチャンたちにどのようなことを知ってほしかったのでしょうか？

まず第一にパウロは、「神の召しにより与えられる望みがどのようなものか。」を知ることができるようにと祈っています。ここで語られている「神の召しにより与えられる望み」とはイエス・キリストを信じることによって得られる救いの望み、キリストの再臨の望みのことではないかと思えます。ある牧師は「それはキリストの復活による死に打ち勝つ望みであり、死を越える望みである。」と語ります。

第二にパウロは、「聖徒たちが受け継ぐものがどれほど栄光に富んだものか。」を知ることができるようにと祈っています。ここで語られている聖徒たちが受け継ぐものとは、おそらく11節で語られている「聖徒たちが受け継ぐべき御国」のことを指しています。彼らエペソ教会のクリスチャンたちはやがて神の御国を受け継ぐということは知っていましたがその受け継ぐべき御国がどれほどすばらしいものかわかっていなかったのでしょうか。その御国すばらしさが本当にわかっている者はどんな犠牲を払ってでも、たとえ自分の命を失ってでもそれを必死に得ようとするのであります。そしてそれを伝えようとするのです。

さらにパウロは第三に、「神の大能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力が、どれほど偉大なものであるか。」を知ることができるようにと祈っています。パウロはここで「力」という言葉を繰り返し用いることによって、神を信じ、信頼して生きている者に働いている神の力がどれほど偉大であるかを知ってほしいと願っているのです。それでは、私たちは神の力の偉大さはどうすればわかるのでしょうか。パウロはローマ人への手紙1章20節で「神の、目に見えない性質、すなわち神の永遠の力と神性は、世界が創造されたときから被造物を通して知られ、はっきりと認められるので、彼らに弁解の余地はありません。」と語っています。確かに私たちは神が造られたこの広大な宇宙や太陽系、地球、そして自然や一つ一つの被造物を注意深く観察することによって、神の力、偉大さを知ることができます。しかしパウロはこのエペソ人への手紙ではこの神の力の偉大さを具体的に20節で示し、「この大能の力を神はキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、」と語っています。パウロはここでキリストを指し示し、キリストに起こった出来事を見れば神の力の偉大さがわかるというのです。そしてパウロはここで、神の大能の力の現れとして、キリストに起こった二つの出来事を挙げています。

まず、一つは神がキリストを死者の中からよみがえらせたということです。すなわち、キリストの復活です。そして次に、神がキリストを天上においてご自分の右の座に着かせたということです。それは死者の復活は普通では決して起こらないことだからです。現代人のみならず古代人も死者の復活などありえないとわかっています。しかしそれが現実に起こったのです。神はキリストを死者の中からよみがえらせたのです。人間の誰も信じることの

できない死からの復活を現実のこととしたところに神の力の偉大さが現れているとパウロは言うのです。それほどキリストの復活は神の力の偉大さを示すものなのです。

そして、もう一つがキリストの天上での神としての即位です。それはそのことによって、キリストに神としての権威が与えられ、すべての支配、権威、権力、主権の上に置かれ、神がすべてのものをキリストの足の下に従わせたからです。それはこの世の権威だけでなく天上の御使いのもつ霊的権威をも含めてキリストはそのすべてのものの支配者となられたということです。それゆえ私たちはこのキリストを王の王、主の主として崇め賛美するのです。

しかしさらに驚くべきことがあります。それはキリストをすべてのものの上に立つかしらとして教会に与えられたということであり、私たちがクリスチャンは、確かに教会のかしらであるキリストがこの世界を、歴史を、支配しておられる王の王、主の主であることを信じ、認めているのです。パウロはここで「キリストをすべてのものの上に立つかしらとして教会に与えられました。」と語っていますが、これはこの世の世界と教会とを区別せずに、教会が世界の真ただ中でキリストの王たることを信じている者として、そのことを世に知らしめ、証しする使命が教会に与えられていることを語っていると言えます。

そしてパウロはさらに教会はそのキリストのからだであると教会を人間のからだにたとえて語っています。パウロはこれを通して教会について何を最も語りたかったのでしょうか。

それはまず第一に、教会はキリストのものであり、他の誰のものでもないということです。過去のキリスト教の歴史を見ていきます時に、このキリストの教会が一部の宗教指導者たちによって私物化されてきた事実があります。これは実に悲しむべきことであります。教会は決して牧師や一部の有力な信徒のものではありません。キリストのものなのです。

また第二に、キリストが教会のかしらであり、キリストのからだであるということは、教会とはキリストのみこころが第一とされ、実現されているところであるということです。この世の世俗の価値観とキリストの教えは様々な点において違いがあります。それゆえ様々な摩擦軋轢があります。偶像崇拜の問題もあるでしょうし、不道德の問題もあります。私たちはキリストのからだに属している者としてキリストのみこころのうちに生きることが何よりも求められているのです。

そして第三に、教会がキリストをかしらとするキリストのからだであると言われる時、それは一つ一つの器官がキリストにつながっており、互いに一致しているということが言えます。人間の体には様々な器官がありますが、すべてが同じ一つのからだにつながっています。そして互いに支え合い、協力し合わなければ何一つまとまった行動を取ることはできません。同じように、教会とは一人一人の信者がキリストにつながっていなければなりません。

第四に、教会がキリストのからだであるということは生きていなければならないということでもあります。パウロは教会をつねれば痛く、切れば赤い血の吹き出る生身の体にたとえています。そして生きている体であれば、時には怪我をしたり、病気になることもあります。しかしその時に各器官の痛みを自分の痛みとして感じるということ、ある器官の癒しを自らの喜びとして感じる、それが生きているということでもあります。そのようにキリストのからだなる教会というのは一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶところなのです。

最後に教会がキリストの体であり、キリストが教会のかしらであるということはキリストがこの地上の教会を通してご自身の御業を行い、栄光を現わそうとしているということです。それほどキリストと教会とは密接に結びついているのです。私たちが地方教会に所属することはキリストご自身にしっかりと結びつくということです。私たちが教会の中で互いに愛し合うことを通してキリストの栄光が現わされることを証していきたいと思います。